

貫戦期の日本の切手に見るナショナリズム

一山の表象に着目して一

山田 志歩（大阪大学）

発表要旨：

日本の郵便切手に初めて山が描かれたのは 1921 年のことである。樋畑雪湖によりデザインされたこの切手は《富士鹿切手》と呼ばれ、富士山と鹿、松らしき植物、そして天皇家の菊花紋章が描かれている。縁起が良いとされるモチーフを並べ、富士山の真上に菊花紋章を配置したこの切手からは、ナショナリズム的思想を読み取ることができよう。樋畑は、志賀重昂の著作『日本風景論』（1894）にて数多くの挿絵を手掛けた人物である。本書においては、雄大な自然風景が「跌宕」の風景として評価され、その代表に火山が挙げられた。志賀は、日本の風景の独自性が急峻な円錐形の火山にあるとし、その中心に富士山を据えた。本書はベストセラーとなり、火山、特に富士山を国粹、国家の象徴として捉える思想が広まる端緒となった。小原（2011）によれば、『日本風景論』以降、学校教科書にて頻繁に取り上げられる等の形で、富士山は天皇の「御真影」と同じく国家統合の象徴として祀り上げられていった。富士山とナショナリズムの結びつきは日本人の共通認識となったのである。樋畑は《富士鹿切手》を制作する際、『日本風景論』のために描いた挿絵を思い起こしたと述べている（樋畑：1930）。つまり、志賀の思想を引き継ぐ樋畑は、国民が国家の象徴として富士山をみなすようになった段階で、満を持して切手に富士山を描いたということである。

《富士鹿切手》の後、現代に至るまで切手において山は幾度も描かれてきた。本発表においては第一に、樋畑が山に込めた意味を精査し、樋畑の山の描き方の定型がいかなるものか考察する。その上で、樋畑の引退後に発行された切手に目を向け、樋畑の切手からの変化と連続性を検証する。例えば 1937 年発行の《愛国切手》では、連なる山々とその上空を飛ぶ航空機がデザインされた。《富士鹿切手》では山頂の上に位置した菊花紋章は、《愛国切手》では航空機の真上にあり、太陽のように航空機と山を照らしている。「愛国」の単語のもと描かれた山と航空機は、第二次世界大戦を目前に控えた時代性をよく表した、やはりナショナリズムの感じられるものと言えよう。戦後の切手で注目に値するのは、航空機と大仏、そして富士山が描かれた航空郵便切手である。GHQ による日本の占領が終了した翌年である 1953 年、それも終戦記念日である 8 月 15 日に発行されたこの切手では、富士山を見守る形で大仏が鎮座し、その大仏の目線の高さ、かつ富士山の上空を航空機が飛行する。敗戦という形で転換点を迎えた日本だが、この切手からは戦前に見られる山とナショナリズムの結びつきが変わらず感じられる。本発表は、貫戦期の日本の切手における山の表象を検討し、現代にも継承される記号としての山が持つ意味を明らかにするものである。

参考文献：

- 小原真史（2011）『富士幻景 近代日本と富士の病』IZU PHOTO MUSEUM
樋畑雪湖（1930）『日本郵便切手史論』日本郵券倶楽部